

二階の娘

野村胡堂

一

「親分、変なことがあるんだが——」

ガラッ八の八五郎が、少し鼻の穴を脹ふくらませて入って来ました。「よくそんなに変なことにで出っ逢くわすんだね、俺なんか当り前のことで飽々あきあきしているよ。借りた金は返さなきゃならないし、時分どきになれば腹は減るし、遊んでばかりいると、女房は良い顔をしてないし」

銭形の平次はそう言いながら、せっせと冬仕度の繕つくろい物をして、いる恋女房のお静の方をチラリと見るのです。

まア——随分、といった顔をお静はあげましたが、また例の八五郎を遊ぶつもりの冗談と判ると、素知らぬ顔をして、縫物の針を動かしました。名残りの虻あぶが障子に鳴って、赤蜻蛉あかとんぼの影が射しそうな縁側に、平次は無精らしく引っくり返って、板敷の冷えをなつかしんでいる或日あるの午後のことです。

「だが、こいつは変わっていますよ親分」

「前触れはそれくらいにして、なんだいその変わっているのは」

八五郎の物々しい調子に釣られて、平次もツイ起き直りました。「今朝、湯島の天神様にお詣りをして、女坂の上から、ぼんやり下谷の方を眺めていると、ツイ二三十間先——家の数にして五六軒目の二階の縁側に出してある行燈あんどんが、辰刻半いつつはん（九時）過ぎだというのに明々と灯が入っているじゃありませんか」

「消し忘れたんだろう」

ガラッ八の報告も、平次に註を入れさせると、何んの奇怪味もありません。

「ところが親分、念のために、ツイ今しがたもういちど行つて見ると、行燈の灯がまだ点いているのはどうでしょう」

「フーム」

「朝消し忘れた行燈が、油も注^ささずに申^{ななつ}刻（四時）近くまで点いている道理はありません。変じゃありませんか、親分」

「成程そう言えばその通りだが、——近頃なんか、そんな禁呪^{まじない}が流行^{はや}るのかも知れないよ。帰りにそれとはなしに、どんな人間が住んでいる家か訊いて見るが宜い。如才もあるまいが、その家へ飛込んで訊いちや打ちこわしだよ」

「やって見ましようか」

その話はそれっきり忘れて、ガラッ八が帰ったのは日が暮れそ



うになってから。

翌る日。

「親分、どうもますます変ですよ」

八五郎のキナ臭い顔が飛込んだのはまだ朝のうちでした。

「昼行燈はなんの禁呪まじないと解ったんだ」

平次も少しばかり真面目になります。

「解らないから不思議なんで」

「それじゃなんにもならないじゃないか」

「ところが今朝は昼行燈が引込んで、赤い鼻緒の草履がブラ下がっているんで」

「さあ解らねえ」

「きのう行燈の出ていた二階に間違いはありませんよ。鴨居かもいから赤い扱帯しじきで、女草履が片っ方ブラ下がっているのは不思議じゃありませんか」

「癪癩てんかんの禁呪にそんなのはなかったかい」

平次の顔も少しキナ臭くなりました。

「癪癩なら草履を頭へ載っけるんですよ」

「いよいよもって解らねえ。——その家にどんな人間が住んでいるんだ」

「取揚げ婆アのお早の家ですよ」

「あの間引をするとか言う、評判のよくない？」

「亭主の六助は中条流ちゅうじょうりゅうの女医者の薬箱持をしたことがあるそうで、殺生なことを渡世にする鬼夫婦の家だから話になるじゃありませんか」

「フーム」

「近所で訊くと、二階には姪めいとか従妹いとことかいう、少し気の変な娘がいるそうですよ」

「何んだ気違いか、——馬鹿にしちゃいけねえ」

平次は煙草をポンと叩いて、天井を突き抜けるような大欠伸おおあくびをしました。岡っ引根性は無駄に刺戟されて飛んだ緊張が馬鹿馬鹿しかった様子です。

「でも、一と月ばかり前までお屋敷奉公をしていたそうで、そりゃ綺麗な娘だという評判ですぞ、親分」

「綺麗な娘と聴くと、無性になり出すからイヤになるよ。面が綺麗だって、気の変なのは止してくれ、付き合いにくくて困るぜ」
「気が変にしても、天神様の境内へ見えるように、いろんな物を持ち出すのは変じゃありませんか」

「そんなに気が揉もめるなら、もう少し見張ってやるがいい。行燈と草履じゃ判じ物にもならねエ」

平次も何にか知ら疑念が残らないでもない様子です。

二

「親分、ちょいと来て下さい。いよいよ変なことになったんだが、あつしじゃ見当が付きません」

三日目の朝、八五郎が飛込んで来ると、いきなり平次を引立てそうにするのです。

「とうとう来やがったか、今日あたりはお前の大変が飛込みそうな陽気だと思ったよ。いよいよその娘が笹かっ葉かなんか担いで、二階縁側の花道へせり出したのかい」

平次は少しばかり面白そうでした。

「それならここへ来る前に、飛び込んで相方を勤めますよ」

「ハッハッハッ、そいつはよかった」

「天神様の女坂の上から小手を翳^{かき}して遥かに眺めると、今朝は何があつたと思います？ 親分」

「解らねエよ、八卦の方はまだ修業中だ」

「二階の障子にブラ下げたのは、麻糸^{あさいと}と、細い紐^{ひも}と、髭^{かもし}の三品だ」

「苧^おと橙^{だいたい}と笠と柿を売物にして、『親代々瘡^{かさ}つかき』と呼んだというのは小噺^{こばなし}にあるが、それとは少し違うようだな、八」

「ちよいと行つて見て下さいよ。何にか恐ろしい事の前兆^{しらせ}のような気がしてならないんだが――」

「よしよし、お前がそんなに心配するなら、少々気が変でも、綺麗な新造のために何んか役に立ってやろう、――尤も、三日とも続けて同じ物を出しや氣狂いの仕業だが、三日とも違った物を出しているのは少しおかしい」

「でしよう、親分」

「氣狂いなら同じことをくり返す筈だ」

平次は湯島への道を辿りながら、ようやく本氣になったらしい調子で、こう八五郎に話して聴かせるのでした。

女坂の上に立つと、今日はまた滅法美しい秋晴れで、江戸の街は深川の端までも見えそうです。お詣りやら行樂やら忙しい人達はツイ眼の下二三十間先の二階縁側に仕掛けた、不思議な判じ物を読もうとしません。

尤^{もつと}も、その隣の家の二階には洪柿を、その向うの家の二階には土用干ほど女物を干している中ですから、髭^{かもし}や細紐を障子の外へ

掛けたところで、前々からの関係を知らない人達には、何んのことやら解らなかつたのも無理のないことでした。

「ね、親分。あれですよ」

八五郎の指さすまでもなく、平次は不思議な二階のあたりを凝つと見詰めておりました。

「一番上、右の方にブラ下げたのは苧^おだよ。その次は紐だが輪にして端^{はじ}っこを結んであるじゃないか。その下は髭^{かもし}だ。これを持て読んで御覧」

「苧、紐、髭ですか親分」

「それじゃ、文句にも地口にもならない」

「麻糸、細紐、毛——と」

「駄目駄目」

二人は玉垣に寄つたまま、暫^{しばら}く無駄を言つて居りました。

「親分」

「なんだ、八」

「妙に仔細^わがありそうで氣を揉ませるじゃありませんか。いきなりあの家へ当つて見ましようか、十手を見せて締め上げれば、わけはありませんよ」

「待ちなよ八、それじゃ、あんまり知恵がなさ過ぎる、——上の糸は苧^{だいたい}や橙^ての術^てでおと読ませるに決っている。その次は紐に相違ないが、輪にして端^{はじ}っこを結んであるから襷^{たすき}さ。襷の下を隠して髭^{かもし}をブラ下げたのは、待ってくれ八」

「親分」

「こいつは、おたすきけと読めるぜ、たすきの下の方が毛で隠れているから、おたすけだ」

「えッ」

「こんな手数のかかる謎々が、白痴こけや氣違いの知恵で拵こしらえられるものか。来いッ八」

「親分」

八五郎はもう尻を端折って、二三十里カッ飛ばすほどの勢いで。が、お早の家は、女坂を降りるともう直きでした。

「御免よ」

平次はいきなり格子を開けると、

「ハ、ハイ、どなた様で？」

お早は少しまごまごして居ります。

「平次だよ。六助はいるのか」

「へエ、あの、どんな御用でしょう」

御法の裏を潜くぐるお早は、高名な御用聞の顔を見ると、何んとはなしにギョツとした様子です。

「二階をちよいと見せて貰おうか」

平次は立ち塞がるお早を払い退けるように突き上りました。

「あれッ錢形の親分」

上の方を向いて大きな声を出すのは、力及ばずと見て、二階に合図を送るつもりでしょう。

「えい、静かにせい」

平次はトントントンと一気に二階へ、唐紙をパッと開けると、中は思いきや空っぽ――

「おや？」

「親分、鴨かもは締めましたぜ」

裏口へ廻して置いたガラッ八が下から大きな声を出すのです。

「そいつを逃すな」

裏口へ飛んで行つて見ると、ガラッ八は中老年人の六助を膝の下に敷いて正に『捕った』の大見得をきっているのです。

三

「もう一人はどうした」

「へエ——」

「娘の方はどうしたよ、八」

「知りませんよ。屋根から雨樋あまどいを伝わって降りて来たのは、この野郎だけで」

「馬鹿だなア、そんな爺はどうでもよかったんだ。行燈と草履と髷かもしを出した娘に用事があるのだ」

「へエ——」

「へエじゃないよ」

平次が腹を立てたところで、それは八五郎の手落ちでも何んでもなかったのです。

「親分、先刻合図をしていたんだから、どこかにいるに違いありません。この野郎を締めて見ましょう」

八五郎の言うのが尤もでした。日頃そんなことをあまり好きでない平次も、十手と捕縄と、脅し文句おどで埒を明ける外はなかったのです。

「やい、先刻まで二階にいた娘はどこへやった。いずれ締めるか沈めるか、売り飛ばすかしたんだろう。真っすぐに申上げなきゃ、しよつ引いて石を抱かせるぞ」

そんな時、ガラッ八の八五郎はなかなか結構な選手でした。平次は黙って成行なりゆきを眺めていさえすればよかったのです。

「言いますよ、私共は悪いことをした覚えはございません。逃げ出したのは、あわてたせいで身に覚えのあるためじゃございません」

六助とお早は観念して皆んな喋舌しゃべつてしまいました。

それによると、今朝まで二階にいた娘は名をお組というだけ、あとは何んにも判りません。年は十八——どうかしたら九くらい、身扮みなりや言葉の様子では武家奉公をしていたらしく、滅法美しいところを見ると、いずれ御法度の不義でも働いて、人知れずここへ預けられたのでしよう。

懐胎みもちの様子はなかったが、取逆とりさか上て少し気が変になっただらしく、昼でも行燈を点けておいたり、草履を縁側へブラ下げたり、無暗に逃出そうとしたり、ずいぶん閉口した——と大した拵事こしらえごとらしくもなくいうのです。

娘の身許は一向解りませんが、一と月ばかり前——先月の十三日の晩六助と懇意こんいにしていた渡り中間の源次という悪党がかった男が『わけを訊かずに、黙って預かってくれ。長くて二た月短くば半月、食扶持くいぶちは月に三両、逃がさずにおいてくれたら後でお礼に五両出す』という約束で娘を預けて、それつきり姿を見せなかったが、けさ不意にやって来て、『娘は外へ合図をしている様子だから、この上預けておくわけには行かねエ、今すぐ伴れて帰る』と言ひ出し、月極めの三両とお礼の五両を綺麗に払った上、駕籠に乗せて、どこかへつれて行ってしまった——と言うのです。

「その通りでございます。これがお礼に貰った八両で、嘘いつわも偽り

もございません」

女房のお早までが口を添えて、懷ふとこころから八両の小判を出して見せるのでした。

「それじゃもう一つ訊くが、源次は今どこに居るんだ」

平次は調子を変えました。

「それがわかりません」

「隠しちゃためにならないよ。お組を預った科とがは知らなかった分にしてやる術てもあるが、それも、お前の出ようひとつだ」

「この間まで元町の本野伊織様御屋敷に勤めておりましたが、今はどこにいるか一向にわかりません」

六助もお早も本当に知っていない様子です。

「ところで、お組という娘が、親許のことでも話したことがあるのかい」

平次は違った方へ話題を持って行きました。

「いえ、何んにも、——聴きも、話もしません」

氣違い扱いにして、娘一人を二階に押し込め、物を言わせずに一カ月睨み通した六助夫婦の安悪党振りの小意地の悪さ——

「ひどいことをしやがる」

平次もさすがに胸の悪くなる心持です。念のためもう一度二階に上がって、娘の住んだ後を見ましたが、手拭一と筋残ってはいません。

「お組はここへ来るとき、何か荷物らしいものを持って来たのかえ」

「いえ、本当に身一つで、手拭から櫛くしまで貸しました」

「お小遣は？」

「巾着も紙入も持っていないなかつたようです。お勝手口からすぐ来た様子で、素足に水下駄を突っかけて源次に追つたてられて来ましたが――」

六助夫婦の説明で、お組がここへ来たのは自分の意志ではないこともよく解ります。

「親分、書いたものがありますよ」

ガラッハは鼻紙に消炭で書いたのを押入の隅から拾いました。「どれどれ」

皺を延ばして見ると、覚束ない仮名文字で、

もとお屋敷に奉公していた源次という男がお勝手口へ来て、三河島の母親がツイそこまで来て内証で一寸逢いたいと言っているからとおびき出し、弓町から湯島までつれて来て、この家へ押込んでしまった。なんのためにこの様な目に逢わされるのか少しも判らないが、二人で見張っているから逃が出す工夫はない。この手紙を拾った方は、どうぞ――

そこまで書いて鼻紙は尽きております。多分こんな手紙を書いたものの、親許へ届ける工夫がなくて、そのまま諦めて了ったのでしよう。

四

平次と八五郎は何か追っ立てられるような心持でした。お組とやらしい娘一人の命ではなく、その奥にもっともっと複雑な犯罪が潜んで今ブスブス燻っている様な気がしてならなかったのです。

元町の本野伊織屋敷へ行って見ましたが、中間の源次は不都合のことがあって、二た月ほど前に暇を出したというだけ、奉公人にも家族にも何んの変わりありません。

源次の宿元を確かめると、やはり今どこにいるか解らないというだけ、多分諸方の部屋を廻って勝負事に浮身を窺うかがっているだろうと言うのが結論おちです。

「親分、大変なことになりましたぜ」

八五郎がぼんやりやって来たのはそれから二日目でした。

「どうした八、いつもの大変と大変が違うじゃないか」

「だって、源次が殺されましたよ」

「何んだと」

「谷中で真つ二つ。腕の冴さえたところを見ると、多分辻斬でしょうよ」

「懐中物ふところは」

「綺麗に抜かれましたよ」

「それじゃ辻斬じゃない」

その頃はまだ、斬った上に懐中物まで抜くようなサモしい辻斬はなかったのです。

「追剥にしちゃ腕が良過ぎましたよ」

ガラッ八はまだ腑に落ちない様子です。

「待て待て、斬って懐中物を抜いたのは、金ではなく証拠になる品物を奪ったのかも知れない。こいつは面白くなったぞ、八。お前は御苦労だが、下つ引を二三人狩り集めて、源次の身許と今までの奉公先を皆んな洗ってくれ。とりわけ、綺麗な小間使か腰元が家出をしたところがあつたら、そいつを念入りに調べるんだ。」

お弓町のあたりが一番臭いぞ、解ったか、八」

「合点ッ、半日経たないうちに、お組の奉公先のお櫃にのこった飯粒の数まで調べて来ますよ」

「頼むよ八」

「それから先は親分の働きだ、今のうちに一と休みしていなさるがいい」

疾風しっぷうの如く飛んで行く八五郎、その忠実な後ろ姿を見送ってどうして今まで手を抜いていたか、平次は自分ながら齒痒はがゆい心持でした。尤もお屋敷方の女中が一人、取揚げ婆アの家の一階から消えたところで、平次が手一杯に働く張合いもなかったのでしょう。

「親分、判った」

八五郎が帰って来たのは、その日も暮れてからでした。

「どこだ八」

平次もツイ、落着かない心持で待ち構えていたのです。

「お弓町の旗本、千三百五十石取の庄司右京様屋敷。源次はそこに三年も奉公して、この春暇を取りましたよ」

「その屋敷で女中がいなくなったのか」

「聴いて下さいよ親分、——そのお屋敷の御当主庄司右京様は二年前から軽い中気でお役御免になり引籠り中大変なことが始まった」

「——」

そうりょう

「惣領そうりょうの林太郎様、二十三になる良い息子だが、ブラブラ病いでお引籠りと言うのは世間体の表向きで、その実、お腰元のお組という十九になる綺麗なのとちょうど一と月前の先月の十三日の晩に手に手を取って夜逃げをしてしまった」

「そのお組がお早のところに押込められたのも先月の十三日の晩だ」

「だから変じゃありませんか」

「水下駄を穿^はいて、握りっ拳^{しゅふし}で道行きをする女があるものか——まあいい、それからどうした、中休みをせずに話して^{しま}了え」

「若様の林太郎様は、同族石崎平馬の二番目娘、——これはお組へ輪をかけたほどの綺麗な天人娘お礼殿と祝言することになったていた。だから腰元風情と夜逃げをする筈はない——とこいつは庄司の屋敷中のヒソヒソ話だ」

「フーム」

話は大分こんがかりました。

「林太郎様は許嫁^{いいなずけ}のお礼にすっかり夢中で、祝言の日を楽しみにしていたと言いますぜ」

「——」

「腰元のお組も綺麗な娘だが、育ちの良いせいかな堅い一方で、おまけに林太郎様は、名代の堅造と来ているから、二人は冗談口一つきいたこともない。手に手を取って夜逃げなどは以ての外——とこれは御近所や屋敷の奉公人たちの噂だ」

「フーム」

「親御の庄司右京殿は、中風で身動きも覚束^{おぼつか}ないが、恐ろしく気が確かな上、弓町きつての一徹^{てつ}者だ。病気の父親を見捨てて奉公人と夜逃げをするような倅^{きゆうりき}に用事はない、久離^{きゆうりき}切^きって勘当の上、甥^{おい}の助十郎を入れて跡取にし、明後日は親類中を呼んでその披露をした上、翌る日はすぐ公儀の御届を済ませ、石崎平馬が承知なら、娘のお礼をそのまま嫁にして、助十郎と娶^め合^あせると言い出し

た」

「その通り運んでいるのか、八」

「あつしのせいじゃありませんよ親分、そんな怖い眼をしたって」

「いっしょに逃げた筈のお組は、取揚げ婆アのお早の家の二階に一と月も押し込められ、可哀想にあんな手紙を書いたり一生懸命の合図を工夫して援け^{たす}を呼んでいたじゃないか。若様の林太郎だってどこでどんな目に逢つてるか判つたものか」

「そこですよ、親分」

「源次が殺される迄は、どうかしたら真物^{ほんもの}の駈落^{かけおち}かと思つたが、お前の話を聴いているうちに、俺にはどうも恐ろしい悪企^{わるだく}みの匂いがして来たよ。悪事を知つた源次を殺して口を一つ封じたのは仕事の山が見えたからだろう」

「――」

「お組は源次の細工や思い付きで隠したのでないことは、渡り中間の勝負好きな源次が、お早夫婦へ仕送りから礼金までキチンと払つたことでも判っている。林太郎様がお組を隠させたのなら一と月も逢わずにいる筈はないし、これはやはり黒頭巾^{かぶ}を冠^{かんこ}つたのが筋を引いて、若様とお組を別々に隠させ、頑固^{がんこ}一徹な父親をけしかけて自分たちに都合の好い跡目を拵^{つもり}え、万事形付いた上で、若様とお組を殺す心算^{つもり}に違いあるまい。あんまり早まって殺すと、万一跡取りが出来ないために、庄司家が取潰しになっちゃ元も子もなくなるから、跡取が決して安心となるまでは、お組はとにかく若様を殺す気づかいはない――」

平次はここまで推理を辿ると、この後の方針が次第にはっきり立って来るのでした。

「親分」

ガラッ八は獲物の匂いを嗅いだ獵犬のようにいきり立ちました。

五

「お屋敷に、御奉公していた源次という男が昨夜谷中で殺されました。別段お掛け合いがあるわけではございませんが、念のためお届け申します」

平次はこんな口実で庄司右京の用人、堀周吉に逢って見たのでした。

「ああ左様か、それは御苦労なことだ」

堀周吉は思ったより丁寧に迎えて、面倒臭がりもせずにあやうをします。年の頃四十六、骨と皮ばかりの華奢きゃしゃな男ですが、算数が長たけているのと、恐ろしく忠実なので、庄司家はお蔭で内福だといわれております。

「ところで、殺されて見ると折助でも中間でも下手人げしゅにんを捜さないわけには参りません。町方の者がお邸方に御迷惑を掛けちゃ恐れ入りますが、一つ二つお話を願いたいことがございますが――」

「構わないとも、何んなりと訊くがいい」

平次の恐れ入った様を気の毒そうに、堀周吉は恐ろしく手輕です。

「源次はお屋敷に奉公中、何にか悪いことをしませんでしたでしょうか」

「あまり良い人間ではないが三年間まず無事に勤めた方だろう」

よ。尤も少しばかり給料の前借は踏み倒して出たが、外に悪いというほどのことはなかったようだ」

何にか予想外なことを平次は聴かされるような心持です。

「誰か源次を怨んでいる者はなかったでしょう、朋輩とか奉公人仲間とか——」

「一向気が付かないな。尤も勝負事が三度の飯より好きだったから、諸方の部屋で不義理もし、怨みも買ったかも知れぬが——」堀周吉の話はこんな程度で、一向取止めありません。

「それから、——これはお伺いしていいか悪いか判りませんが、お屋敷の若様、林太郎様は、ただ今何方にいらっしゃるでしょう」

平次の唐突な問いに、堀周吉はギョツとした様子ですが、

「それは知らない——知っているなら苦労はしないよ。まあ、そんなことは訊いてくれるな」

打ち萎れてこう言われると、押して訊く勢いもなくなります。

平次は他にもいろいろのことを訊いて見ましたが、堀周吉は老巧な用人らしく口を緘んで、それ以上は何んにも話してくれません。

帰り際に奉公人に逢って、それとはなしに捜りを入れると、いよいよ明日の親類方の寄合いで、甥の助十郎を家督に決め、林太郎の許嫁のお礼を改めて助十郎の嫁として内祝言をさせ、明後日は公儀の御届を済ませて、庄司右京は隠居、助十郎は改めて將軍家へ御目見得という段取になりそうです。

平次はその足で元町の石崎平馬の屋敷へやって行きました。これは庄司右京の一族と言っても、禄高はたった百二十石、お礼の美しさと、林太郎の執心がなかったら、この祝言はモノになりそ

うもなかったでしょう。

平次は辞を尽して一生懸命頼みましたが、主人石崎平馬は所用と言って、逢ってもくれません。奉公人たちにそつと訊くと、庄司家の若様林太郎が行方知れずになった時は、主人平馬もお嬢さんのお礼も、さすがに驚いた様子でしたが、親類たちの口入と、庄司右京の望みで、養子助十郎へそのままお礼を嫁にと懇望されると、一議に及ばず、渡りに舟で応じ、それっきり林太郎のことは忘れてしまつて、行方を捜す様子もないことが判りました。

家と家との縁組以外、この人達は何んにも考えていなかったのでしょう。林太郎が執心した美しいお礼も、結局は千三百五十石に嫁入する気持ちしかなかったのかと思うと、平次も何にかうら淋しい心持になります。

「親分、どうでした」

門の外に、八五郎は立てつづけに欠伸ばかりして待っていました。

「呆れて物が言えないよ、この上は今日中に、——遅くとも明日の夕方までに林太郎様を捜し出すんだ」

「お組は？ 親分」

「それほど娘の方が気になるなら、お前は三河島のお組の親許へ行ってくれ。俺は養子の助十郎と、庄司一家の者の出入りをもう少し突き止めて見る」

「それじゃ親分」

「晩に逢おう」

銭形平次はこうして、飛んでもない武家のお家騒動の渦中に飛込んでしまったのです。

源次が谷中で殺された晩の助十郎、平馬、周吉などの動きを調べるつもりでしたが、これは平次の大縮尻おおしくじりでした。武家屋敷の奉公人は口が堅い上、実際庭口から裏門へそっと出入りするなどはお勝手元の住人たちが知っている筈もなかったのです。

あっちこっち無駄足をして、がっかりして帰ろうとすると、

「親分、——銭形の親分さん」

後ろからそっと呼止める者があります。妻恋坂の淋しい道には、四方に聴いている人もありません。

「お前さんは？」

「庄司様の庭男でございます。友吉と申しますんで」

六十近い大きな老爺ですが、頑丈がんじょうそうな腰を二つに折って、ひどく物に脅おびえている様子です。

「友吉と言いなさるのかい、用事は？」

平次は期待に息を吞みます。

「私がこんなことを申上げると、後の祟たたりが怖しゅうございますが、あんまりなことで、見るに見兼ねました」

「話してくれ、皆んな御主人のためになることだから」

平次は友吉を促うながしながら、妻恋稲荷の前に踞しゃがみました。

「若様がお組と夜逃げをしたなんて、あれは大嘘でございます。お組は源次の野郎が誘さそい出しましたが、若様は、お気の毒なことに——」

「林太郎様はどうした」

「その晩一合召上ってお休みになると、それきり翌る朝はお姿がございません。多分お酒に毒でも入っていたことでございましょう。足腰の立たぬようにして、夜中に運び出されたに違いないと、

私は一人で吞込んでおります」

「どうして、そう吞込んだのだ」

「その晩、裏門へ駕籠が一挺着きました。町内の本道（内科医）、北村道作様の駕籠でございます。駕籠は何にか積んで行ったようでしたが、まもなく道作様は歩いて帰りました」

友吉の言うことは、なかなか含蓄がんちくがあります。

「よしよし、それでよく解った。真夜中に江戸の町を平気で飛ばせるのは医者の駕籠くらいのものだ、——それだけ聴けば見当はつく。ところで爺さんとつ、これからどこへ帰るんだ——」

「弓町の屋敷へ戻りますが——」

「気を付けるがいいぜ」

「へエ——、では親分、若様をお願い申します」

友吉は平次に別れて淋しい道を辿りました。ほんの二三十間も行った頃、

「えーッ」

横合から飛出しざま、真二つになれと斬りかけた者があります
が、その太刀先は僅かに外れました。

襲撃の寸前、間髪を容れず、鏢びたせん錢が一枚飛んで来て、曲者の鬢びんのあたりを強したたかに打ったのです。

流るる刃を取直す間もなく、第二第三の錢は流星の如く飛んで拳へ、額へ、そして第四の錢は危なく眼の玉を打とうとしたのです。

曲者は一散に逃げ失せました。

「爺さん、危なかったな、——庄司の屋敷へ帰るのは諦めて、当分俺の家へ来ているがいい」

平次は大地へへタへタ崩折れる友吉を援け起しました。

六

三河島のお組の親許を訪ねて帰った八五郎から聴くと、お組はそこへも帰らず、正直そうな両親は娘が行方不明と聞いて、庄司家へ行って剣突くを喰わされ、どうしようもない不安な日を送っているのです。

「この上は医者の方を手繰るの外はあるまいよ」

平次は休む隙もなく八五郎と一緒に弓町まで出かけました。

本道の北村道作は、界限に古く住んだ医者で、悪事に加担しもうもありませんが、とにかく充分に用心をして、十手に物を言わせて真っ向から脅かすと、

「私は何んにも知らない。あの晩急病人があるからと庄司家の使で行って見ると、急病人というのは嘘で、一刻ばかり用人と碁を打たせられて、いざ帰ろうと思うと駕籠がない。仕方がないから歩いて帰ったが、後で若い者から聴くと、なんでも病人らしい者を私の駕籠に積んで、無理に巢鴨の庚申塚まで運んだということだ。行先は若い者が知っているだろう、私は何んにも知らない」と言ったようなたよりない話です、どうかしたら、薄々事情を知っていても、うんと脅かされて物を言えなかったのかも知れません。

出入りの駕籠屋の若い者に逢って、その晩の行先を確かめ、庚申塚の近所で、植辰の寮を聴くと、すぐ解りました。が踏込んで見るとそこは空っぽ――。

夜中ながら、近所を叩き起して訊くと、何んでも一と月ほど前に、氣の変な武家を出養生に連れ込んだが、若くて丈夫で暴れようがひどく、近所へ聴えも悪いので、間もなくどこかへ移してしまったということが判りました。

駒込まで引返して植辰の本家を叩き起して訊くと、近所の言う通り、庄司家から頼まれて氣の触れた若い武家を巢鴨の寮に預かったが、若い丈夫な男が二人附いていても持て余して、とうとう橋場へ運んで行ったというのです。

行先は橋場の船頭の文七という男の家――。

平次と八五郎が橋場へ着いたのは、もう夜が明けて翌る日になつてからでした。

「今日一日の辛抱だよ、八。今日中に捜し出さなきゃ、明日は林太郎とお組の死骸が、心中した体でどこかに投り出されるに決っている」

平次は馬道で朝歸りの客のために開いている飯屋に飛込み、そそくさと腹を拵^{こさ}えながら、八五郎を励ましました。

「大丈夫ですよ、親分。自慢じゃねエが、喰う物さえ喰わして置きゃ、もう二た晩三晩寝なくたって驚きやしませんよ」

熱い味噌汁を啜^{すす}りながら、八五郎は肩を聳^{そび}やかします。この男の取柄は、全くこの忠実と、疲れを知らぬ我武者羅^{がむしゃら}だったかも知れません。

橋場の文七のところへ行くと、文七は留守。一と月も前から寄り付かないそうで、女房は^{おおやきもち}大嫉妬で半病人になっている有様です。何を訊いても噛み付きそうで、手掛りを引出すどころの沙汰ではなく、さんざん^{てい}の体で引揚げてしまいました。

尤も、近所で訊くと、大方の見当だけは付きました。がその話というのがまた大変です。

橋場の文七は、どこから持出したか、自分の船に大一番の早桶はやおけを積み、諸人を嫌がらせながら、川筋を上へ下へとたった一人で漕ぎ廻っておりましたが、それもどうしたのか、七日ばかり前からふつりと姿を見せなくなったというのです。

「早桶はひどいことをしやがる」

その中に庄司の惣領林太郎を入れて、人目を誤魔化ごまかして日の経つのを待ったことは、疑うべくもありません。二十三歳の強健で正気な男を、命に別条のないように一と月も監禁して置くということは江戸の街中では容易のことではありませんが、早桶に押込んで船の中に据え、関東の川筋を漕ぎ廻っている分には随分人眼を誤魔化せないこともなかったでしょう。

「ところで、文七の船は帰っているのか」

「船は何時の間にか空っぽになって、川岸ぷちに繋いでありますよ。だからお神さんが納まらないんで、——幸い鳥越のお百の家を知らないからいいが、あの穴が解った日には出刃庖丁騒ぎだ」

近所の衆の暗示に富んだ言葉を手繰って平次と八五郎は鳥越のお百の家というのに行つて見ると、四十男の文七は、七日ぶっ通しに呑んで、性も他愛もなく酔いつぶれているのです。

お百を呼出して訊くと、文七は余程金を持っているらしいという。いずれ早桶を船に積んで十七八日も漕ぎ廻ったお礼でしょう。この上は文七の口を開かせる外はありません。

水をブツ掛けて、どやし付けながら訊くと、

「——どこの侍だか知るものか。ともかく、二人で気の違った若

い武家をつれて来て、ほんの二十日ばかり陸へ上げないようにしてくれというんで。お礼は一日一両さ。外に無事に済ませば褒美が五両だ。へッ、へッ、二十五両と稼いだのは悪くなかったぜ、——最初は葛籠^{つづら}へ入れて船の中に飼っておいたが、知合いの船が五月蠅^{うるさ}くて叶わねエ。それから大一番の早桶を買って来て入れたのは大した知恵だろう。船番所の眼さえ除^よけて通れば、気味が悪がって、傍へ寄る船もねえのさ、——早桶の中身をどこへやったというのか。一日一両になるから、もう十日も稼ぐつもりだったが、七日ばかり前に二人の侍が来て、大分イキが悪くなったから、伴れて帰っても大丈夫だろうってやがって、駕籠へ放り込んでどこともなく行ってしまったよ」

文七は平次と八五郎に責められて、漸^{ようや}くこれだけのことを言いました。

「駕籠はどこのだ」

「この辺にウロウロしている四つ手じゃねえ。山の手の辻駕籠だよ、どこの駕籠か判るものか」

それ以上は何を聴いても判りません。

七

神田の家へ引揚げたのはもう昼頃、庄司家の親類会議が開かれるまで、あと三刻^{どき}精々です。

「弱ったな八」

銭形平次も、さすがにこの時は悲鳴をあげました。

「親分、どうしたのでしょうか」

「お組と林太郎様と一緒に、どこかに隠してあるに違えねえ——が」

「すると、親類会議が済んで庄司家の跡取が助十郎と決まれば、すぐ二人を殺して心中と触れ込むわけですね」

「多分そんなことだろうと思う」

そこまでは考えられますが、さてそれ以上はどうにもなりません。

そのうちに次第に陽が傾かたむいて、未刻やっ（二時）になり申刻みなつ（四時）になります。平次は先刻から煙草ばかり立て続けに燻くゆらして、煙の中から眼を光らせておりますが、何んとしても結構な知恵は浮びそうもなかったのです。

「武家のお家騒動なんかに足を踏込んだのが間違いだつたな、八」
平次はどうとう投げてしまいました。上野の暮酉刻むつ（六時）が鳴ります。

「そう言つたつて親分」

已やむに已まれぬ平次の正義感と、お組——謎々の合図を工夫する娘の魅力に引かされた八五郎の好奇心が、ここまで深入りさせて了しまつたのでした。

「一本つけましょうか」

女房のお静は、平次の機嫌をほぐす妙薬を心得ていたのでした。「そうしてくれ、八と爺さんと三人で、今晚は少し過すことによようよ」

平次は大きく伸びをして雀色すずめいろに暮れて行く秋の街を見やりました。

「お気の毒なのは若様でございます」

あれからズーッと平次のところにいる友吉爺やは洩水と涙とを一緒になで上げます。

「諦めることだ、——俺は町方の岡っ引だから、武家方のことは手のつけようがない。これが商人の家なら、踏込んで親類会議を延ばさせる手もあるが——」

「——」

妙に沈んだ心持を、お互にどうすることも出来ません。

「隠した場所はやはり、屋敷の近くだな——」

平次は最初の猪口を嘗めて、腕を拱こまぬきました。

「まだそんなことを考えているんですか親分」

「考える気もないが、——忘れないよ」

「無理もないが、忘れることにしましょうよ、親分」

「だが、待ってくれ。ね爺さん、あの屋敷の中に、滅多に召仕の者の入らない蔵か物置がなかったかい」

平次の叡智は、活潑に動き始めたのです。

「ありますよ。小さい宝物蔵で、奉公人は足も踏み入れませんが、この間から御用人の堀様とそれのお配偶のお滝さんがちよくちよく入るようで——」

「それだよ」

平次は立ち上りました。

「親分、何にがそれなんで？」

八五郎は手酌で二三杯つけ様に呷あおっております。

「でも、あの宝物蔵へ若様を隠したら、食物をどうして運んだのでしょう」

と友吉。

「それで俺も迷ったんだ、死にも生きもしないようにして置く分には、そんなに沢山の食物が要る筈はない、——もう迷うことはないよ。お静、食物を少し用意してくれ、軽いものがいい。七日もろくに食わずに居る人間に精のつく物がほしいんだ。さア、八、一緒に行くか」

「行かなくてどうするもんで親分」

八五郎は中腰になって、徳利からラッパ呑をやっております。

「私も参りましょう、何にかのお役に立つかも判りません」

爺やの友吉までが武者顫いふるをして起ち上りました。

八

その晩庄司家の奥座敷に集ったのは、主人の庄司右京を始め、用人堀周吉、養子の助十郎、石崎平馬、その娘のお礼を始め近い親類からずっと七八人。燭台しよくだいを人数ほど並べて、秋の夜の薄冷えを火桶に凌ぎしのながら、相談は次第に纏まりまとかけておりました。

主人の庄司右京は何分軽い中風とは言っても口も不自由なので、用人の堀周吉が代って弁じます。

「若様——林太郎様には、一カ月ほど前に召仕の組と逐電ちくでんいたし、今以て在所が判らず、御主人様ことのほか御立腹でございます。私ども家来一統、いろいろとおなだめ申上げましたが、何んとしても御聴き入れがなく、このこと万一公儀御耳に入らば、庄司の家の瑕瑾かさとも相成ること、一日も早く林太郎様を勘当し、甥御おいご様の助十郎様を御家督に直し、御主人様には御隠居の上、ゆるゆると御養生遊ばしたいと強たつての御望のぞみでございます」

堀周吉は一座を見渡して、こう達弁につづけました。

「就ては、御親類様方御一統の思召を承わり、御異存がなければ明日にも公儀に届出の上、改めて世間へも披露いたしたいと存じます。それから、林太郎様御許嫁石崎平馬様御息女お礼様は、せっかく当家に御縁のあったことでもあり、そのまま当家にお迎え申し上げ、御跡取助十郎様と祝言いたさせたいと存じます。皆様御異存がございませんか、——御言葉がなければ御同意下されたことといたし、右様に取極めて、別席にて一献差上げたいと存じます」堀周吉は言い納めて一座を見渡します。誰も異論を称える者もなく、——僅かに病人の主人、庄司右京の眼に、激しい忿怒らしいものが走りましたが、やがてそれも悲しい諦めとなって、人々の笑いさざめく声に紛れてしまいます。

「それでは、公儀御届のため、皆様の御判を頂戴いたします」

堀周吉が何やら書面を上座の方から廻し始めました。

「待った」

不意に弱々しいが凜とした声、——一座はしんとまりました。

「その御判、お待ち下され。庄司林太郎、それに参って申し開き仕る」

「――」

あッと顔見合わせる一座の中へ、月代も髯も伸び放題ながら清らかな紋服に着換えた林太郎は、細々とした自分の影を踏んで、——冥途を行く亡者のように静かに進み出たのです。

「や、どこから、どうして」

驚く堀周吉、さすがに喰ってかかりもなりません。林太郎はそれを尻目に、

「父上様、御心配を相かけ申訳もございません。林太郎は召仕な
どと逐電^{ちくでん}はいたしません。それなる堀周吉の奸計^{かんけい}に陥り、ただ今
まで獸類に等しき扱いを受けました」

父右京の前にピタリと坐って、静かに一座を睥睨^{へいげい}するのでした。
「お、お」

右京は口もきけません、嬉し涙が老の眼を溢れて、膝を濡ら
すばかり。

「何が証拠、——飛んでもないことだ」

飛付きそうにする堀周吉は、縁側にひれ伏した銭形平次に止め
を刺されました。

「証拠は山ほどある。植辰、文七、友吉、六助夫婦、皆んなお上
の手に押えてあるぞ」

「お前は何者だ」

堀周吉は血眼になって叱咤するのを、

「平次、父上も御承知だ。その悪者を縛ってくれ」

林太郎は指を挙げて指しました。

×

×

平次が堀周吉その他の悪者を縛り上げるあいだに周吉に荷担^{かたん}
した親類たちはコソコソと逃げ出しました。

嵐の後の風^なぎを見測らって、林太郎と平次から、改めて父庄司
右京と、残る親類たちにことの経緯^{いきさつ}を説明して聴かせます。

「——そこで、もう一つ御願いがございます。お礼殿と許嫁の約
束は私から申すまでもなく、最早破談になったことと思います。

お礼殿は助十郎殿が御引取り下さるよう——私は召仕の組を改め
て妻として迎えたいと存じます。組とは別々に誘拐^{ゆうかい}され、何んの

関りもないことはただ今まで申上げた通りでございますが、私が行方知れずになって三十日も経たないうちに、助十郎殿と祝言をする気になったお礼殿とは、心構えが違っているように存じます。御親類方のどなたかに、組の親元をお願いしたいと存じます」

肉体的に弱り抜いていても、氣丈者らしい林太郎のハキハキした言葉を聴いて、頑固一徹とふれ込んだ父親右京が合点合点をして喜んでいるではありませんか。

振り返ると、石崎平馬も、その娘のお礼もいつの間にか逃げ出して、縁側には爺やの友吉が附添って、お組は大したやつれもなく、初々しくもかしこまっているのです。林太郎と同じ宝物蔵のこれは階下の唐櫃の中に入れられていたのを救い出して身を浄めさせ、身扮を改めてここへ呼出したのです。

「平次、それもこれも、その方のお蔭だ。この恩は忘れないぞ」

林太郎はいざり寄って平次の手を取りました。

「いえ、この手柄はあつしじゃございませんよ。お組さんの合図とそれを最初に見付けて、あつしを引張り出したあの八五郎の野郎の手柄で――」

平次に指されて、八五郎は首筋のあたりを搔きながら、無暗に恐れ入っております。

「親分、変な捕物だね」

帰る途々八五郎は考え込んで許りいる平次に話しかけました。

「捕物じゃないよ。こいつは飛んだ千代萩さ、――だが、お家騒動はすることがネチネチして嫌だね」

「でも、あの娘はよかったぜ、親分」

「お組のことか、――唐櫃から出した時は、手を合せて泣いてい

たぜ」

「お亭とたすき襷とかもじ髷をブラ下げて、『おたすけ』は嬉しかったな」

「命がけの合図だったのさ。笑っちゃ気の毒だ」

そう言う平次もカラカラとわけもなく笑いたい衝動を感じて
おりました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十五年十一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>